



自然科学書協会 会報

NSPA JAPAN

THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN



2026 年 1 月 15 日 No.1
(通算 114 号)



目 次

1. 年頭にあたってのご挨拶（理事長 池田 和博：丸善出版） 2
2. 【特別寄稿】自然科学書協会創立 80 周年にあたって 4
「自然科学書協会に期待すること」（矢幡 秀治：日本書店商業組合連合会 会長）
3. 出版・印刷人合同勉強会 報告（広報委員会） 5
4. 年末会員懇親会 報告（総務委員会） 6
5. 会員社訪問 社長インタビュー（羊土社 社長 一戸 敦子） 8
6. 特集記事：「印刷現場を歩く」（永野 雅貴：壮光舎印刷） 10
7. 事務局だより 15
8. 編集後記 16



発行人：池田 和博 / 編集：広報委員会
一般社団法人 自然科学書協会
<https://www.nspa.or.jp/>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 神保町 101 ビル 3 階

TEL：03-5577-6301



◆ 1. 年頭にあってのご挨拶 ◆

理事長 池田 和博

2026 年の年頭にあたりまして、謹んで新年のお慶びを申し上げます。早いもので 2 期目の理事長を拝命してから約半年が経過いたしました。会員各社の皆さま、業界団体をはじめ日頃お世話になっている皆さまにおかれましては、本年も当協会の活動にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昨年は改選期にあたりましたので、新体制での始動が 7 月の定時総会後となり、事業活動の中心を担う新委員会も遅れてのスタートとなりました。

主な実施事業は

- ・自然科学書フェアの開催
- ・会員向け研修会の開催
- ・会報発行
- ・著作権関連の諸活動

となりますが、前期 5 月から 7 月にかけて大垣書店イオンモール KYOTO 店で自然科学書フェアが開催され、8 月にはフリーランス新法に関する出版梓会との合同研修会が行われました。今期は、会報の発行に加えて、会員各社のご協力のもと出版クラブビル 3 階ライブラリーにて「自然科学書協会展」が広報委員会により開催されました。SARTRAS や SARLIB、JCOPY など著作権に関連する団体の会合に参加し、情報の共有などを図っております。このように、引き続き当協会の事業の柱である「自然科学関連の啓蒙と普及」「自然科学関連図書などの国内外への広報と普及」「著作権の普及と啓発」に努めてまいります。

出版業界は相変わらず厳しい状況におかれています。電子書籍は堅調といわれてはいるもののコミック系を中心とした話のようで、当協会がかかわる自然科学系専門出版物においては、多少の伸びはあるにせよ紙の書籍の落ち込みを補填するには及んでいません。

リアル書店が減少している状況はもちろんです、比較的大型の書店も文具やグッズとの併売と店舗が変化しており、その分書籍の棚面積が減っていると思われます。そのため、自然科学系専門出版物は書店を訪れた人の目に触れる場が減っているのではないかと推察しています。目的の分野でなんとなく目に留まった書籍をパラパラとめくって起きる偶然の出会いの機会が減っているのではないのでしょうか。ちょうど、紙の国語辞典で語句の意味を調べてなんとなく隣の言葉や近くにある言葉に目がいき「へえ～」と思うことがなくなってきたのと同じように。

もちろん専門書籍が厳しいのはそうした点からだけとは思いません。書店の視点で見ると売れなくなったから置かなくなった、ということもあると思います。根本的には少子化・人口減の問題があります。一冊の成書を読まずとも、部分的な知識であれば判別能力さえあればネットワークで答えが探しやすい世の中でもあります。さらに、教科書を取り上げてみると、教科書指定そ



のものが減った、指定があっても買わなくても済むようになった、中古サイト、さらには補償金問題、などなど、いろいろなことが複合した結果が売上減のいまの状況といえます。

文部科学省の調査によると、ここ数年大学入学者数は減っていません。10 年前、20 年前に比べるとむしろ増えています。一方で、学部学科によると思いますが、半数近くの大学が定員割れを起こしているという報道もありました。しかしながら、18 歳人口は確実に減っていきます。大学生を読者対象に考えた場合も、分野やレベルそれに時間軸をどう捉えていくか難しいところです。

とはいえ、「市場環境をどう捉えて、どのような出版物を生み出し、どのように知らしめていくか」という行為は、出版社のもつ出版活動そのもので、市場動向や時代背景に関係なく常につきまといっていることのように思います。つまり、紙や電子など媒体や形状、あるいは製作過程や販売環境の変化はあっても出版活動そのもののキーに変化はないのではないかと。私自身当協会の代表ではありますが、一出版社の代表でもあります。数字が悪いと嘆きたくもなりますが、そのことを忘れずに前を向くように心がけています。

先が見通せないどころか足元が見にくい状態といっても過言ではないのかもしれませんが、当協会では委員会を中心とした活動を通して情報の共有・発信をして皆さまのお役に立てるよう務めてまいります。

当協会は今年創立 80 周年を迎えます。この 80 年は日本の科学技術の発展とともに歩んできた歴史そのものだと思います。そこに自負と責任を持ちつつ、今後も専門情報の流通に寄与してまいりたいと思います。どうぞ皆さまのご指導とご協力をお願い申し上げます。



◆ 2.【特別寄稿】自然科学書協会創立 80 周年にあたって ◆

「自然科学書協会に期待すること」

日本書店商業組合連合会

会長 矢幡 秀治

創立 80 周年、誠におめでとうございます。日頃より弊会ならびに組合加盟店の売上に多大なご貢献をいただき、心より感謝を申し上げます。

貴協会の創立は 1946 年、専門出版社の同業団体の中で戦後最も早い時期に設立されました。混乱の続く社会において将来の日本の発展を見抜いていち早く組織化を決断された創始者の方々に敬意を表する次第です。

科学技術の分野は日夜進化を繰り返しており、それに追隨して最先端の技術を書籍にまとめて発刊する作業はとても大変なものと拝察いたします。理学、工学、農学、医学、家政学と、まさに自然科学全般を網羅している取り扱い分野の広さにも目を見張るものがあります。

昨今、世間を賑わせている AI は、著作権などにも大きな課題を投げかけております。こういった課題に対して、貴協会がいち早く著作権保護などの活動にも着実に取り組んでいることを知り、大いに感銘を受けました。今後のご活躍に益々期待を寄せております。

さて、再販維持を強く主張されている貴協会におかれましては、昨年 5 月 1 日に発表の「再販売価格維持契約書（ひな形）の一部改訂」（第六条（2）を削除）に、是非ともご理解をお願い申し上げます。書店の存続が危ぶまれている窮状にご理解いただき、図書館などの図書調達については、値引きなし、地元書店からの納入、装備代別建てを実現できるよう、弊会の活動をご支援くださいますようお願い申し上げます。また価格設定も、各出版社は大変厳しいところと理解しておりますが、取次、書店と流通の利益に考慮した値付けをしていただけますと幸いです。

自然科学の分野においては、現象を理解するうえでデジタルを利用した視覚的表現がとても大切なことと思いますが、紙の書籍を用いた知識の習得も重要な位置を占めております。個人的な経験ですが、いまでも数式などを思い出そうとすると、参考書に書かれているページの印象がそのまま頭の中によみがえってまいります。紙面のレイアウトが、絵のように頭に刻み込まれて知識となって定着しているのです。

最後になりますが、今後も貴協会ならびに会員出版社の皆さまが日本、そして世界の経済発展に寄与され、社業がご発展されることを切にご祈念申し上げます。



◆ 3. 出版・印刷人合同勉強会 報告 ◆

2025 年 11 月 14 日（金）13 時から 15 時まで、東京都印刷工業組合主催（自然科学書協会・出版梓会 共催）で、日本印刷会館 2F 会議室とオンライン併用のハイブリッド形式の勉強会が開催されました。

勉強会に先立ち、東京都印刷工業組合出版メディア協議会の会長である日岐浩和氏よりご挨拶があり、今回は 3 団体合計で約 150 名が勉強会に出席していることのご報告をいただきました。合わせて、今回の勉強会も多くの方にご参加いただいたことについて、お礼を述べられました。

今回の勉強会では、昨年度の研修会でも講師をされた、デジタルハリウッド大学大学院教授の橋本大也氏をお招きし、「出版社のための先進的 AI 活用最前線 ―AI と人間の共創―」と題してご講演いただきました。

本講演では、実際に生成 AI サービスを用いて

- ・文字データと画像データから自動動画作成
- ・キーワードから自動絵本作成
- ・ブレインストーミングからプレゼン資料作成
- ・要件定義から情報システム自動作成

など、仕事にも活用できる多くの具体的な事例をご紹介いただきました。

生成 AI は相手の能力に合わせて回答する仕組みになっているため、生成 AI を活用して仕事の効率化を図るには利用者側のスキルも必要とのことでしたが、これからは生成 AI を上手に活用することも大事な仕事のスキルになることを実感しました。

講演後は、会場の出席者やオンラインでの参加者からの質問が多数寄せられ、活発な質疑応答がなされたのち、無事に勉強会が閉幕しました。

（広報委員会 新井 明良：コロナ社）



◆ 4. 年末会員懇親会 報告 ◆

恒例の年末会員懇親会が、2025 年 12 月 4 日（木）18 時より、千代田区の如水会館にて開催され、来賓 13 名、会員 19 社 44 名の計 57 名が出席しました。

冒頭の挨拶に立った池田和博理事長は、教科書売上の低迷、たび重なる原材料価格の高騰、出版物輸送における運賃問題の深刻化、専門書を扱う書店の減少など、当協会会員社を取り巻く環境の厳しさについて率直に述べました。そのうえで、当協会が 2026 年に 80 周年を迎えることに触れ、いまは長い歴史の中でも困難な時期と認識しているが、これから 90 周年、100 周年と迎えられるように活動していきたいと決意を示しました。



池田理事長

続いて、来賓として登壇した一般社団法人日本書籍出版協会の小野寺優理事長は、アメリカにおいて AI で生成された科学的根拠に基づかない本が氾濫している問題に触れ、国際的なルールづくりの必要性について言及されました。また、玉石混交の情報が飛び交う時代だからこそ、信頼できる出版物、とりわけ専門書の価値は見直されていくのではないかと述べられ、当協会への期待を示されました。

同じく、来賓として登壇した日本出版販売株式会社・仕入部の池田健部長は、今年の書籍全体や専門書の売上状況に触れたうえで、顧客を書店に呼び込むための様々な施策を進めていく旨を述べられました。また、今後のトラック新法施行による運賃倍増の可能性にも触れ、業界全体での協力体制の必要性に言及されました。

続いて、司会者より来賓全員を紹介し、出席者全員による盛大な拍手をもって謝意を表した後、乾杯に移りました。来賓の株式会社トーハン・書籍部の櫻井秀則部長が登壇し、読書推進に向けた BtoC の取り組みなどを紹介され、出版業界が元気になるような働きかけを一緒にやっていきたいと述べ、乾杯の音頭を取られました。



年末会員懇親会の様子

その後は懇談の時間となり、随所で活発に情報交換や談笑をする姿が見られ、年末を彩るにふさわしい熱気に包まれました。

宴もたけなわの 19 時 30 分過ぎに中締めとなり、村上和夫副理事長が、自然科学の分野で質の高い出版物を出していくことによって国力を保っていくことに少しでも貢献していきたいと述べ、一丁締めによってお開きとなりました。

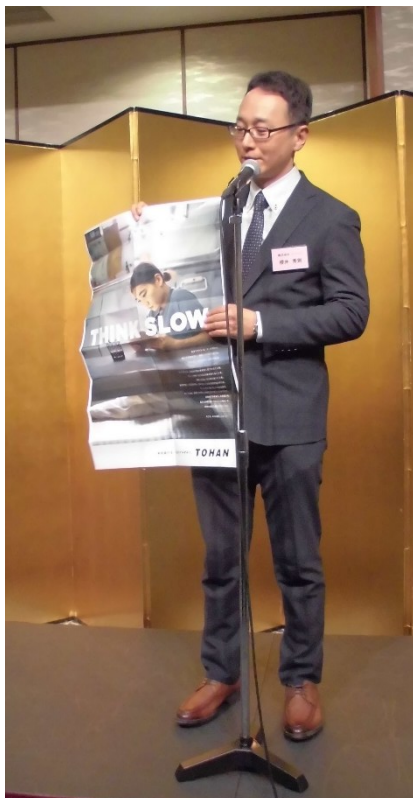
(総務副委員長 森田 浩平：緑書房)



小野寺氏



池田氏



櫻井氏



村上副理事長

◆ 5. 会員社訪問 社長インタビュー (No. 18) ◆

● 社長紹介 ●

いちのへ あつこ
一戸 敦子

● 訪問社情報 ●

【社名】株式会社 羊土社 (YODOSHA CO., LTD.)

【創立】1979 年 (昭和 54 年) 2 月 7 日

【HP】<https://www.yodosha.co.jp/>

【主な出版分野】生命科学、医学、薬学、
栄養学、リハビリテーション



■ テーマ1「本について」

ー 会社の転機となった本は何でしょうか？

羊土社は「研究」「医療」「教育」の3つの柱で出版活動に取り組んでおり、それぞれに転機となった本があります。

創業からの基盤である「研究」の転機は、1983 年 (昭和 58 年) に創刊した「実験医学」です。生命科学研究の最先端を紹介し、2026 年で 44 年目を迎えます。続く「医療」は 1999 年 (平成 11 年) に創刊した「レジデントノート」が転機になりました。研修医の日常診療に寄り添う誌面づくりを 27 年続けています。そして「教育」では、1999 年 (平成 11 年) に刊行した「はじめての一步のイラスト生化学・分子生物学」が多くの教育現場で活用され、現在の教科書出版に繋がっています。

ー 本が売れない時代、今後の本への可能性は？

科学や医療の現場の価値観が多様多様に細分化し、生成 AI などの新たな技術によってコミュニケーションの在り方が大きく変わろうとしています。一方で、情報が氾濫する時代だからこそ、著者の人間力を乗せた「本」という媒体の重要性が再確認されるのではないかと考えています。

ー 社長にとって本とはどういう存在でしょうか？

またお薦めの本や愛読書などがありましたら教えてください。

皆さまと同じように、私も子供の頃から当たり前のように本が横にある環境で育ちました。困ったときや悩んだときに、気がついたら本を手にとっていました。友だちのようで家族のようで、メンターのような存在だと考えています。

必要に応じて様々なジャンルの本を手になりますが、最近愛読しているのは「島図鑑」です。私は日本の島巡りが趣味で、訪れた島にマーカーを引いて、次はどこに行こうかとページをめくるたびに癒やされています。自分の体験と共に成長していく、そんな相棒のような本との付き合い

方もあるんですね。

■ テーマ 2「株式会社 羊土社について」

— 会社の雰囲気をどのように感じていますか？

羊土社のメンバーはみな科学や医療を敬愛していて、公平で正確な出版活動に取り組む姿勢を持っていると感じています。そういった真摯さを感じる一方で、オフィスを見渡してみると、マスコットキャラクターの「ひつじ社員」が至るところにいたり、片隅ではパイナップルが栽培されていたりと、遊び心のある雰囲気にも元気をもらっています。

— 現在の社員やこれから入社してくる若い人へ期待や希望はありますか？

これからも科学と医療に真摯に向き合い、多くの人々に出会って感動しながら、アイデアと創造性を発揮していただきたいと願っています。

— 社長が考えるこの会社の一番の財産は何ですか？

本は、人がつくり人が届けて人が読むものですので、そこに携わってくださるすべての「人」が羊土社になくてはならない財産だと考えています。

■ テーマ 3「過去・未来について」

— 社長になる前にはどのような経験をされてきたのでしょうか？

薬学部を卒業し、広告デザイン事務所で見習いデザイナーとして修行をしました。その後、羊土社に入社して営業事務を経たうえで編集部に配属となり、「実験医学」の編集担当と編集人を務めました。そして 2021 年 1 月より、母である会長（一戸裕子）との共同代表の任に就きました。

— 2025 年は世界そして日本にとっても大きな変化が起きましたが、今後本はどうなっていくと思いますか？

社会も技術も驚異的なスピードで変化していて、私たちは毎日必死で悩みながらその激動に対応しているように感じます。だからこそ、本という不変の器に刻まれた確かな情報と先人の知恵が、未来への決断の拠り所として価値を持っていくのだと信じています。

■ テーマ 4「自然科学書協会の今後について」

— 今後取り組みたいこと、期待していることは何でしょうか？

科学の重要性は、今後もさらに高まっていくことと思います。自然科学書協会の活動が、本という確かな礎のもとで、多くの読者に科学の喜びと知恵を広めていただくことを心から期待しています。

◆ 6. 特集記事 ◆

今回の特集記事は、印刷会社の方に記事をご寄稿いただきました。実際に書籍ができあがる印刷現場ではどのような作業をしているのか、ぜひお読みいただき皆さんの仕事に活かしてもらえればと思います。

(広報委員会 新井 明良：コロナ社)

「印刷現場を歩く」

壮光舎印刷株式会社 営業部 永野 雅貴

1. はじめに

このたびは、貴協会の会報に記事を寄稿する機会を賜り、大変光栄に存じます。

先日、貴協会会員社の方に弊社壮光舎印刷株式会社 本社工場をご見学いただきました。その際、想定以上のご関心をお寄せいただき、組版・印刷・製本といった「現場」について、より多くの皆さまにも知ってもらえればと思い、簡単ではございますがこの誌面を借りて紹介いたします。

2. DTP および CTP 部門

DTP (デスクトップ・パブリッシング) 部門では、クライアントの要望に添ったデザインに基づき、DTP ソフトを使ってデータの作成を行います。このソフトは、イメージとしては Word や Excel をさらに高度化したもので、文字や図表、写真の配置をコンマ数ミリ単位で正確に行うことができます。

DTP の作業では、紙面の完成度を高めることが重要です。皆さまもレポートや書類を作成する際に、「何行に何文字」「文字の大きさやフォントは…」と考えてつくりますが、DTP では文字の配置や行間、文字間などを精密に調整し、読みやすさや見た目の印象を整えます。完成した紙面のイメージそのものが「読者体験」に直結するため、細部への配慮が欠かせません。

さらに DTP では、文字組版だけではなく、写真や図表の編集作業も重要です。人物写真の色調調整やトリミング、図表の作成といった作業により、紙面の印象を高めます。特にビジュアルが重要な雑誌などでは、こうした作業の精度が紙面の質を左右するため、オペレーターの腕の見せどころとなっています。

一方、CTP (コンピュータ・トゥ・プレート) 部門では、完成した DTP データをインキごとに刷版 (ハンコ) に出力する工程を担当しています。

印刷物は一枚の大きな紙に複数ページを印刷し、裁断や折り加工を経て本の形になります。CTP では、各ページを紙の上に適切に割り振り、印刷後に正しい順番で本になるように配置します。

その後、プルーフ (印刷見本) を出力して、データや割り振りに不備がないかを確認します。



写真1 刷版ができあがるところ（原版はアルミ製）

このチェックを通過して初めて、刷版を出力して印刷に使用します。

CTP は、データを扱っている DTP に対して、「データを 3 次元の形に変化させる」業務といってもよいかもしれません。

ここから先の工程では根本的な修正ができないため、刷版出力前のチェックは、データ作成者にとっての「最後の番人」として重要な役割を果たしています。DTP 作業者も気づかなかった不備を CTP で発見してフォローするファインプレーもあり、この連携によってよりよい製品の制作に貢献しているのです。

3. 印刷部門

弊社本社工場では菊全判対応の「油性 5 色印刷機」や「UV 式速乾 4 色印刷機」が主力として稼働しており、茨城県の子会社工場には 4/6 全判両面印刷対応の「油性 8 色印刷機」もあります。

カラー印刷では、基本的に CMYK（シアン・マゼンタ・イエロー・ブラック）の 4 色のインキを使います。プリンターのトナーを想像いただければと思いますが、この 4 色を掛け合わせることで写真やイラストの微妙な色合いを表現できます。さらに、特定の色を正確に出したい場合には「特色（スポットカラー）」を使うこともあります。企業ロゴの指定色やブランドカラーなど、CMYK だけでは出せない色を再現するための特別なインキです。

印刷の現場では、CTP 部門で作成した「刷版」を印刷機にセットして印刷します。刷版はインキ 1 種類につき 1 枚必要です。両面モノクロ印刷では 1 色の両面で合計 2 枚、両面カラー印刷では 4 色×両面で合計 8 枚、特色を加える場合はその分さらに刷版が必要になります。もちろん、使用するインキも増えることになりますので、モノクロ印刷に対してカラー印刷のコストは 4 倍、あるいはそれ以上に増えることになります。こうして刷版とインキが正確に組み合わせることで、紙面の色や仕上がりが忠実に再現され、高品質な印刷物が完成します。

以前は印刷、特にカラー物を印刷するというのは、まさに職人芸的な技が求められる作業でした。見本となる印刷物に対し、正確な濃度バランスを保って印刷するのは困難な作業で、オペレーターがルーペで細かく観察し



写真2 油性印刷機



写真3 色味をチェックするオペレーター

つつ「もう少し濃く……」といった調節をしながら印刷機をコントロールすることが求められます。

私たち営業担当も、デザイナーの方や編集の方との打ち合わせで「ここはもっと濃く、でも濃くなりすぎも困る……」といった要望を受けるのですが、たとえデータ上で修正したとしても、実際の刷り上がり具合を確認することが必要です。そういった場合には、デザイナーの方に工場までお越しいただき、現場で直接確認いただきます。この際にも、印刷機のオペレーターはデザイナーの方の要望に添って、刷色を細かに調節するなど、細心の注意を払いつつ、要望に応えます。

デザインを具現化する印刷部門は、実際に製品を製造する生産部門であり、これから店頭に並ぶ商品の色合いや質感を直に体感でき、大変やりがいのある部門でもあるのです。

なお、現在弊社の印刷機では、インキ濃度のチェックや調整を機械的に行う管理システムを用いて、色調整の作業を自動化しています。これにより、色の一貫性を保ちながら、効率的に印刷を行うことが可能になっています。

4. 製本部門

製本部門では、印刷された用紙を最終的な製品に仕上げる作業を担当します。

製本所内には、印刷物を折丁に加工する「折機」、製本を行う「並製製本機」、カバー掛けや売上カード（書店で本に挟まっている短冊）を挿入する機械、最後には自動梱包機などが配備されています。これらの機械は緊密に連動しており、効率的に製本作業を進めることができるよう、動線を考慮した配置になっています。

印刷現場から搬入された印刷物は、それぞれに必要な加工機械に運ばれます。中でも本の中身、本文の印刷物は「折機」にかけられます。基本的に書籍の本文は「折丁」と呼ばれる 16p、8p、



写真4 轟音で稼働する折機（作業者は耳栓が必須）

4p といった複数のページのかたまりで形成されており、「折機」は平面の用紙を「折丁」に加工する機械です。弊社では、おおむね毎時 8,000～10,000 枚のスピードで機械が稼働しています。ちなみに筆者が手作業で「折丁」を折ろうとすると 1 枚折るのに 10 秒はかかります。「折機」はおおむね筆者 25 人分の労働効率を備えていることになります。

なお、一般に書籍の本文ページは「16 の倍数」が効率的とされています。これは、本文の印刷用紙に印刷可能なページ数が 16 の倍数であること、製本時に 16p の「折丁」を束ねることが効率的であることに起因しています。書籍の巻末に広告がたくさん載っていたり、後書きが妙に長かったりするの、ページ数の調整が目的となっている場合もあるのです。

「折丁」に加工された本文は、製本機にセットされます。製本機は「折丁」を束ねる「バインダー」、背に糊付けする機械、表紙を装着する機械、重量監視装置、余白部分を切り落とす断裁機などが合体したレーン状の機械です。当初バラバラだった部品が、製本機を出てきた時点で、ほぼほぼ完成形となります。必要に応じてカバー掛けや売上カードの挿入を経て、梱包すれば完成です。

製本部門でのやりがいは、印刷物が完成形に近づいていく過程を直接見守ることができる点です。製本機の精密な調整や機械の運用を行いながら、最終的な製品を仕上げる瞬間に立ち会えることが、この仕事の大きな魅力となっています。なにより、1 冊の本がキレイに仕上がったときの達成感は、格別なものなのです。



写真 5 製本所の半分を占める長大な製本レーン

5. 最後に

このように、弊社では各部門が密接に連携し、効率的かつ高品質な印刷物をつくりあげています。印刷業界では、「データ作成」「印刷」「製本」それぞれ単一の業務のみを行う会社も多い中、弊社は自社で一貫した生産ラインを都内に構えており、これは大変な強みとなっています。

各部門での生産資材はノンタイムで次の工程に移行することが可能で、輸送における省コスト、

省日程に大きく寄与しています。また、各部門の物理的な距離の近さは、万一問題が発生した際にも、即座に対応することを可能としており、部門同士の信頼関係構築にも大きく貢献しています。それぞれの部門が連携し合って働くことで、たがいの業務の奥深さや困難な点を理解し、ともに課題を乗り越えることができます。それによって、製品を完成させた達成感をしっかりと実感し、やりがいを感じながら業務に取り組むことができるのです。

しかしながら、これらを順調に進めていくうえで欠かせないのが出版社さまの協力であることも事実です。特に、作成する媒体についての指示や仕様が曖昧で、「なんとなく……な感じで」「よい感じでお任せします」というように明確でない場合は、作業現場にとっては判断ができないことも多く、結果としてトラブルの原因になる可能性があります。

また、スケジュールの管理も重要です。作業現場は常に様々な案件について作業をしています。もちろん、依頼があった場合には可能な限りのホスピタリティを発揮して、細かく対応をいたします。しかし、原稿のやり取りにおける予定の遅れや、急な作業依頼は、作業現場にとってはプレッシャーとなります。この場合も、思わぬ勘違いや思い込みからミスを誘発する可能性があり、結果的に製品の品質に悪い影響を及ぼしかねません。

印刷物は、出版社さまと印刷業者がタッグを組んで初めてできあがります。この両者が相互に協力し合う「心遣い」こそが、思い通りの製品をつくりあげるために最も必要なエッセンスであると感じています。

さて、特集「印刷現場を歩く」は以上となります。最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。拙い文章で恐縮ですが、この特集から印刷、製本の現場に対し、より興味を持っていただけましたら幸いです。

もしもご不明点などがありましたら、以下に弊社 HP の QR コードを掲載いたしましたので、遠慮なくお問い合わせください。また、工場見学をご希望の場合にも、喜んで対応させていただきます。



<https://www.sokosha.co.jp/>

● 会社紹介 ●

社 名：壮光舎印刷株式会社
所 在 地：東京都荒川区荒川 8 丁目 20 番 1 号
電 話：03-3802-4545（代表）
03-3802-6311（営業）
設立年月日：昭和 21 年 3 月 23 日（創業昭和 6 年）

◆ 7. 事務局だより ◆

●理事会

- ・ 12 月 4 日 (木) / 文化産業信用組合 会議室
- ・ 1 月 15 日 (木) / 日本出版クラブホール・会議室

●委員会

- ・ 11 月 12 日 (水) 販売・出展委員会 / 文化産業信用組合 会議室
- ・ 11 月 21 日 (金) 80 周年記念史小委員会 / 文化産業信用組合 会議室
- ・ 1 月 8 日 (木) 広報委員会 / 文化産業信用組合 会議室

●届出事項変更届

<販売・出展委員会委員の変更・追加>

- ・ 株式会社 化学同人 旧委員：甲斐 知佳 新委員：合木 顯五
- ・ 株式会社 朝倉書店 新委員：磯崎 晃

<著作・出版権委員会委員の追加>

- ・ 株式会社 朝倉書店 新委員：川口 達也

●退会

2025 年 11 月 30 日付にて下記 3 社が退会されました。

- ・ 一般社団法人 家の光協会
- ・ 株式会社 近代出版
- ・ 株式会社 総合医学社

■東京都印刷工業組合出版メディア協議会来訪

2025 年 12 月 1 日 (月) に、東京都印刷工業組合出版メディア協議会会長の日岐浩和氏が当協会の池田理事長を訪問し、同協議会で作成された「原材料、エネルギーコスト、労務費上昇にともなう価格転嫁のお願い」の会員社への周知を依頼されました。ここに会員各社の皆さまにお知らせいたします。

◆ 8. 編集後記 ◆

謹んで新春のお慶びを申し上げます。会報をお読みいただき、誠にありがとうございます。
2026 年の幕開けとなる今号はいかがでしたでしょうか。

今号の特集記事「印刷現場を歩く」では、私たちが日頃から大変お世話になっている印刷会社さまの代表として、壮光舎印刷株式会社にご協力いただきました。私たち出版社にとって、印刷会社さまは最も身近なパートナーでありながら、その工程の細部や技術の進化については意外と知らないことも多いのではないのでしょうか。今回の特集記事では、一冊の本が形になるまでの緻密で丁寧なお仕事と、品質を支えるプロフェッショナルの熱意に触れることができ、大変貴重な学びが得られました。

今号の各所でも触れられているとおり、出版不況や原材料の高騰など、業界を取り巻く環境は依然として厳しいものがあります。しかしながら、バリューチェーンの要である印刷現場の皆さまとより一層手を取り合い、一丸となってよい本づくりに励んでいきたいと、あらためて決意した次第です。

新しい一年が、皆さまにとって、そして出版業界にとって希望に満ちたものとなることを心より願っております。本委員会としても、皆さまの出版活動に役立つ情報をしっかりお届けできるよう、より一層尽力してまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

(広報委員会 原 純子：オーム社)

● 第 75・76 期広報委員会 ●

委員長：牛来真也（コロナ社）

副委員長：及川雅司（養賢堂）

委員：原 純子（オーム社）

加藤義之（建帛社）

高田由紀子（恒星社厚生閣）

新井明良（コロナ社）

飯岡千恵子（丸善出版）

中島健介（養賢堂）